

立場を更に進め、閻浮統一の天業を理想として折伏を主張した点に相異がみられるが、化他の菩薩行を勝義の事観とした本筋に変わりない。

以上の各論は凡て、宗祖の本義に還らんとする努力の結晶であるが、結果的に日透のそれは天台理観の亜流に墮し、日受のそれは但信口唱の易行門に流れ、日輝を俟ってはじめて両者の立場は止揚され、自行安心の域を超え、化他の菩薩行を提起し、更に智学の所論を容れて事観の面目を發揮し、現代日蓮教学の底流をなすに至った。

結局、菩薩行と云う「行動」の提起は宗祖の心を心として法華経に直參する限り当然に生ずるのであって、宗祖が法華経に問い求めて得られた果の世界は、逆に宗祖の御心に自己否定的に顯わされ、根を下して、対社会的には「化他の弘経」として打出されて行ったとみるべきである。

云わば化他の菩薩行こそ現代及び将来を通じて事観の生命となり宗教の本質をなすべきものであって、宗祖の事本思想にかなうと信ずるものである。

主なる参考文献

- 充洽園全集
- 昭和定本遺文
- 「日蓮宗教学史」 執行海秀著
- 「日蓮教学の研究」 望月敏厚著
- 宗学全書（顕本法華宗部）

○ 「事一念三千義」 観如日透著

Vimutimaggā, dy Arahant Upatissa—especially “on Dist inguishing Virtue”

岡 田 栄 照

解脱道論 (VIMUTTAMAGGA) の英訳が The Path of Freedom と題して Ceylon の Buddhist Publication Society から一九六一年秋に刊行され、Maha Rodhi Society の幹事、BHIKKHU ANURDDHA の好意によって小生に恵送せられた。

訳者は江原亮瑞、セイロンの Soma Thera、ビルマの Kheminda Thera の各師である。

本論の成立、考証については長井真琴、千瀧竜祥、両博士がすでに紹介済みであり、本稿に於ては、紙面の都合によって、分別戒品 (On Disting. vishing) を主として、英訳文について若干気付いた点を述べてみよう。

概して忠実な直訳によって一貫されるが、訳語の選択に際しては SYNONYMS の取捨にあたり極めて細心の配慮がなされ、

「修」について言えば *procedure, conduct, practise*, などが巧妙に分別せられ、「犯戒」の場合には、*break, transgress, commit* などが前後の *SITUATION* に応じて漢訳の意図するところと合致して使用せられている。

「成相応及諸煩惱不起退悔。得定成滿」

「相応、及び諸煩惱の不起、退悔を成じ、定の成滿を得」(干渴氏訳)に相当する英文は、*One can control the passion, destroy rigidity and fulfil concentration* であり、「退悔を成じ」が *destroy rigidity* となるのであろうが、パーリ文の相当所は *thīra* (惛沈、俱舍論四、成唯識論六、大毘婆娑論三七などにである)であって惛沈、退悔、*rigidity* の結合の線が判然としない。

「悪言離散し、花を焼き火に事へ」は *it is worship fire an to offer flowers to it* とあり「悪言離散」に相当する英文がみられない、*搗食* に於ける *material food*、糞火に於ける *dung fire* は理解しがたい。

行門品四に於ける「癩」は国訳の註では「恐らく癩か」とあるが、これは「瘡」と同意語であって英訳の *ague* は「悪感」の意味である故にともにあたっていない。

「戒」を *precepts, virtues*, 時として *morals* などがあてられているが、その使用にあたって統一を欠如していると思われる。

漢訳「解脱道論」から英訳された本論 (*The Path of Freese dom*) は、*Vissuddhimagga* と比較対照の結果を理解することが

でき、本論の特殊性を一層明確にし、重要な法相熟語には一々原語を付し、更に関係文献をかゝげ詳細な索引を付するなど、この種の聖典の実際の価値の運用に効果あらしめている。

C'est là qu'il compose le Vissuddhimagga (Cidimh n de pureie) vaste encyclopedie du dogme bouddhisque qui encore de nos jours fait autorite.

と評した H. Arvon の言葉は、*VIMUTTIMAGGA* についても言えるものと確信する次第である。

三大秘法と

四法成就との関係について

駒野教爾

大覚世尊靈山会上に於て法華八ヶ年の大会正に終焉を告げむとせし時、普賢菩薩は遙か宝威上王国に於て釈尊が長さに説き玉う法華経を聞き、諸の菩薩と共に娑婆世界に來つて聴受し、恋法惜く能わず釈尊に「再演法華経」を請い奉つた、即ち「若善男子善女人於如来滅云何能得是法華経」と爾時に仏普賢に告げ玉わく、「若善男子善女人成就四法於如来滅後必得是経」と是の普賢菩薩の要請は「護持此経」の信念よりして末法濁惡世に於ける自他両門の修行法としての法華経本迹両門開顯の要を請い奉つた。之の要